

# 甲骨文における「下上」

田宮 克真\*

## 1. 甲骨文の「下上」に関する問題

### 1-1 はじめに

中国殷王朝<sup>(1)</sup>における祭祀・占トの記録である甲骨文資料<sup>(2)</sup>はその 19 世紀末の発見以来、多くの研究者の関心を惹き、膨大な研究成果が世に出されてきた。しかし、それら数多くの研究努力にも関わらず、依然として研究者間でコンセンサスが得られていない問題も残されている。

そうした問題のひとつが、「下上」と呼ばれる神格に関するものである。甲骨文中に見られる他の神格とは異なって、具体物や固有の名称ではない一対の指示語によって呼称されていることから、「下上」は個別の神格ではなく、複数の神格に対する集合呼称であると考えられる。必然的な流れとして、この語が指示する「複数の神格」とは何かについて、議論が生じた。甲骨に刻まれた卜辞の内容からは、あるいは当時の最高神である帝（上帝）と同等の存在のようであり、あるいは殷王の祖先神に類するようでもあり、未だ諸説並立して見解の一致を見ないところである。「下上」の語が何を指すか、という問題は、当然「下上」が指す個別の神格にも影響するものであって、これを解決せずには、甲骨文における宗教状況の総体的理解は成り得ない。

本論文では、甲骨文資料の分析と先行研究の批判的検討によって、この「下上」なる神格について、その語が指示する神格の確定に取り組む。ただし、これを単に言語学上の単語解釈の問題として扱うのではなく、このグループ化され、集合的観念によって捉えられる神格が、当時の宗教的世界観の中でどのような位置付けを与えられていたのかを念頭に置いて、この集合呼称が用いられた意義を考えていきたい。甲骨文という文字言語資料は、占トという宗教的行為と本質的に不可分であり、その中に現れる神格である「下上」という宗教的単語の問題もまた、当時の宗教観念の中に位置付けられ、解釈されなくてはならないからである。

### 1-2 「下上」についての説：先行研究での議論

王朝での祭祀・占トの記録である甲骨文資料の中には、最高神である帝や、殷王の祖先神、自然物や自然現象を神格化した自然神など、数多くの神格が登場している。当然、そうした神格の性質の解明は、早くから研究者たちによって取り組まれており、「下上」も

---

\* 東京大学宗教学研究博士課程 2 年

<sup>(1)</sup> 紀元前 16～11 世紀ごろに黄河中流域（現在の河南省安陽市小屯村付近）に存在した、現在実在の確認されている中国最古の王朝。甲骨占トに基づく祭祀政治が行われた。

<sup>(2)</sup> 殷王朝後期（紀元前 13～11 世紀ごろ）に製作された、最古の漢字文資料。王朝での占トに用いられた加工した亀甲や獣骨に、その内容・結果等の情報を刻字したもの。

その対象となっていた。そのうち、主要な説を以下に列挙する。

胡厚宣は「下上の上は上帝であり、下は地祇百神をいう」<sup>(3)</sup>と述べており、池田末利、徐仲舒らがこれを支持する<sup>(4)</sup>。一方で胡厚宣は、「下上・上下の上は上子ともいい、天神上帝を指すと思われ、下は下子ともいい、人王下帝を指すと思われる」<sup>(5)</sup>との別説も提出していて、こちらでは「下」を「人王下帝」、すなわち殷王とその祖先神であるとしている。島邦男が「上」を上帝、「下」を下乙などの祖先神とする<sup>(6)</sup>のはこれに類するといえよう。

陳夢家は、「上は上帝・神明・先祖を指し、下は地祇を指す」<sup>(7)</sup>と述べて、「上」に帝・神明・祖先神の3者が含まれていて、「下」が地祇であるとし、《周礼》春官宗伯「上下神示に禱祠す」や《論語》述而「上下神祇に禱爾す」などの「上下」であるとする。趙誠もこれと同様の説を唱える<sup>(8)</sup>。

胡・陳両氏の説は「上」「下」いずれも神格の代名詞であるとする説であるが、郭沫若は「上天・下民はどちらも順応しない。天の心も民衆の意思も知ることができないから、占卜によってこれを定めるのである」<sup>(9)</sup>と、「下」は殷王の支配する民とその民意であるとする説を出している。

以上に挙げた説は細かい違いこそあれど、「下上」の語に帝が含まれるとする点で一致しており、従来はこの見解が主流であった。しかし、これらに対して、近年「下上」に帝は含まれないとする説がいくつか見られる。例えば蕭良瓊は、卜辞中に「上示」「下示」という祖先神の集合呼称があることなどを指摘し、「下上」は祖先神の集合呼称である、と述べている<sup>(10)</sup>。管見の限り、これが最初の「下上」に帝は含まれないとする説のようである。これに応じて、末次信行は、「下上」を祖先神とする点は蕭説に従いつつ、その語の指すところについては、本来は帝に与えられていた権能が、時代を下るにつれて殷王の祖先神に移譲されていく過程において、祖先神の中でも特に功績の大きかった大乙＝上乙と祖乙＝下乙が、「帝」と対等な存在として扱われた時期があり、この2者の総称として「下上」があった、とする<sup>(11)</sup>。

<sup>(3)</sup> 「下上之上、必為上帝。而下者或指地祇百神而言」。胡厚宣：《殷代之天神崇拜》《甲骨学商史論叢初集》，濟南：齊魯大学国学研究所，1944，8 ページ。

<sup>(4)</sup> それぞれ、池田末利『殷虚書契後編綴文稿』上（広島大学文学部中国哲学研究室，1964 年，77 ページ），徐仲舒：《甲骨文字典》（四川：四川辞書出版社，2012（初版 1988），5 ページ）。

<sup>(5)</sup> 「下上上下之上，疑皆指天神上帝而言，猶上子，下疑指人王下帝而言，猶言下子」。胡厚宣：《殷卜辞中的上帝和王帝（下）》《歴史研究》10，1959，96 ページ。

<sup>(6)</sup> 島邦男『殷墟卜辞研究』，弘前大学文学部中国研究会，1958 年，198 ページ。

<sup>(7)</sup> 「上指上帝神明先祖，下或指地祇」。陳夢家：《殷虚卜辞綜述》，北京：科學出版社，1956，568 ページ。

<sup>(8)</sup> 趙誠：《甲骨文簡明詞典》，北京：中華書局，1988。

<sup>(9)</sup> 「謂上天下民均不順応也。天心民意両不可知，故以卜定之」。郭沫若：《殷契粹編》綴文編，140 葉上，1084 片。

<sup>(10)</sup> 蕭良瓊：〈「上，下」考辨〉《于省吾教授百年誕辰記念文集》，吉林大学出版社，17～20 ページ，1996。

<sup>(11)</sup> 末次信行「殷代武丁期卜辞にみえる「帝」と「下上」－戦争諾否の観点から－」『漢字学研究』27～44 ページ，2013 年 3 月。

「下上」の語が示す神格について、主要な説は概ね以上の通りである。大まかにまとめれば、従来は帝が含まれると考えられた「下上」について、近年では祖先神の集合呼称であって、帝は含まれないとする説が提唱されているが、いずれの説においても、「下／上」が具体的に何を示しているかは研究者によってまちまちで定まりきっていない、ということになる。

## 2. 「下上」の語が示す神格

### 2-1 「下上」ト辞の検討

「下上」の語が示す神格について考えるにあたっては、当然「下上」の語が甲骨文のト辞中でどのように用いられ、その神格にどのような権能が与えられているのかを見ることから始めなくてはならない。

甲骨文の索引である『殷虚ト辞綜類』<sup>(12)</sup>（以下、『綜類』）には、「下上」を含むト辞例が39例（33片）収録される。そのほとんどは戦争・征伐の諾否を「下上」に貞トするものであるが、少数例、祭祀犠牲に関するもの、疾病に関わるものなどが見られる。

#### (1) 戦争諾否に関わるト辞例

『綜類』中では30例がこれにあたる。次のようなト辞が典型的である。

《甲骨文合集 6316》

癸丑トして<sup>こく</sup>殷貞う、<sup>こく</sup>隹れ王<sup>こく</sup>方<sup>こく</sup>を正（征）する勿りせば、下上若（諾）する弗く、我其<sup>ゆう</sup>れ又（祐）を受けざるか。<sup>(13)</sup>

「方」は国名・部族名を示す語である。ここでは「<sup>こく</sup>方」と呼ばれる方、すなわち敵対部族に対する、殷王による征伐について、下上の諾否およびそれによる祐助の有無を貞トしている。戦争諾否に関わるト辞には、例えば「正（征）」に替えて、それぞれ迎撃と出撃を意味する「逆伐」や「往伐」などの語が用いられるト辞<sup>(14)</sup>や、殷王以外にその臣下が登場するト辞<sup>(15)</sup>などのバリエーションが存在するが、いずれも内容に大きな違いは無い。

#### (2) 疾病に関するト辞例

疾病に関するト辞例は以下の1例。

《甲骨文合集 14222 正甲》

貞う、隹れ下上は、王に疾を<sup>疾</sup>せざるか。<sup>(16)</sup>

<sup>(12)</sup> 島邦男『増訂 殷墟ト辞綜類』、汲古書院、1971年。

<sup>(13)</sup> 《甲骨文合集 6316》癸丑ト殷貞勿隹王正<sup>こく</sup>方下上弗若不我其受又

<sup>(14)</sup> 《甲骨文合集 6202》、《甲骨文合集 6220》など。

<sup>(15)</sup> 《庫方二氏藏甲骨文字 1592》、《甲骨文合集 3958》など。

<sup>(16)</sup> 《甲骨文合集 14222 正甲》貞不隹下上<sup>疾</sup>王疾

「𠂔」は災禍を降す義であり、下上の降禍によって、王が疾病を受けるかを貞卜する卜辞である。次の(3)に見るような下上への祭祀・供犠は、あるいはこうした下上から降される災禍を取り除くためのものだったかもしれない。

### (3) 祭祀犠牲に関する卜辞例

祭祀犠牲を主題とする「下上」卜辞は、以下の2種類が存在し、『綜類』では合計6例挙げられている。

《殷虚文字 乙編 4065》

己卯卜して設貞う、奏循する有るに、下上若（諾）すか。<sup>(17)</sup>

《甲骨文合集 809 正》

貞う、王多屯を𠂔するに、下上に若（諾）せらる又（有）か。<sup>(18)</sup>

《殷虚文字 乙編 4065》について、「奏」は祭祀用語であるが、「循」は軍事演習の義があり、この2字の連語は、あるいは軍事行動に関する祭祀を意味するかもしれない。

《甲骨文合集 809 正》の卜辞について、「𠂔」字は「𠂔」に作り、斧鉞により人牲を捧げる祭祀を示す。なお、徐仲舒らに「伐（𠂔）」字の異体字とする説があり<sup>(19)</sup>、その場合は戦争諾否に関わる卜辞として分類できるかもしれないが、別形に作る点から、ここではこの説は採用しない。

以上(1)～(3)が、甲骨卜辞に見える下上の権能である。まとめるならば、(1)下上は主に戦争の諾否と祐助を与える神格であり、(2)また降禍の主体ともなることがあって、(3)そうした権能に応じて、しばしば祭祀を享受することがあった、ということになる。

## 2-2 従来説の検討

甲骨文における最高神である帝は、卜辞中で戦争に際して殷王に祐助を与え、またあるいは降禍の主体ともなることが知られており、これは前節で見た下上の権能と似通っていること。また、帝には「上帝」の別称が存在<sup>(20)</sup>し、呼称の上でも「下上」に通じる点がある。「下上」に帝を含むとする従来説の根拠は、この卜辞上の権能の類似と、呼称上の類似の2点にまとめることができよう。

既に述べたように、蕭良瓊はこうした従来説を批判した。曰く、「下上」は一對の対概念から成る語であるから、「下上」の「上」を上帝とするなら、それに対応する「下」の

<sup>(17)</sup> 《殷虚文字 乙編 4065》己卯卜設貞有奏循下上

<sup>(18)</sup> 《甲骨文合集 809 正》貞王𠂔多屯不又若于下上

<sup>(19)</sup> 《字典》巻八、893 ページ。

<sup>(20)</sup> 《甲骨文合集 10166》などの甲骨文の他、伝世文献に習見。

概念が存在するはずである。しかし、「上下帝」など帝についての対概念の存在を示す語は甲骨文中に見えずである<sup>(21)</sup>。また自然神に関しても、基本的に戦争諾否の卜辞や他部族に関する卜辞に登場する例が無く<sup>(22)</sup>、また「下上」に類する総称や集合性が認められないため、権能の面からも呼称の面からも、「下上」には含まれないと考えられるため、「下」に当てはめるのは不適当とする。また殷王の「帝」称号使用と「下上」や「上帝」の語の登場時期が一致しないことなどから、殷王祖先神を「上帝」に対応する「下帝」とする胡厚宣説も不通とする。すなわち、「下上」の「上」を上帝とする場合、「下」に相当する対概念として適当な神格が甲骨文中に見出せないと結論づけ、従来説を退けている<sup>(23)</sup>。

この蕭良瓊の批判は、的を射たものである一方で、従来説の根拠のうち、「上帝」呼称の存在にしか応答しておらず、下上と帝の卜辞における権能の類似性については論じられていない。そこでここでは、前節で見た「下上」卜辞と「帝」卜辞とを比較検討することとで、別角度から従来説への批判を試みたい。

まず、前節(1)で見た戦争に関する卜辞例について、戦争卜辞は「帝」卜辞にも習見である。

《甲骨文合集 6664 正》

甲辰卜して争貞う、我馬方を伐つに、帝は我に又（祐）を受（授）くるか。一月。<sup>(24)</sup>

敵対部族の征伐について貞卜する内容であり、文末には「下上」卜辞にも同様の句が多く見られる「帝受我又（祐）」の句が見られる。これと類似の句として「我其受又（祐）」もあり、これらの語句を含む卜辞は、『綜類』では「帝」卜辞に 20 例、「下上」卜辞に 26 例、それぞれ収録されている。貞人の「争」が《甲骨文合集 6202》などの「下上」卜辞にも登場していることなどからも分かるように、同時期の卜辞で「帝」と「下上」の両者に対して、戦争における祐助の有無という、同一の内容が貞卜されていたことになる。

一方で、「下上」卜辞に見られた、戦争について諾否を貞卜する卜辞は、「帝」卜辞には存在しない。「帝」卜辞での「若（諾）」字の使用例は、『綜類』では 34 例挙げられているが、具体的な内容が示される卜辞のほとんどは、作邑の諾否を貞卜するもので、その他は任官や祭祀に関するものが少数見られるだけである。

《鉄雲蔵亀 220.3》

貞う、王邑を作るに、帝は若（諾）するか。<sup>(25)</sup>

<sup>(21)</sup> 殷王朝末期の帝辛期の青銅器とされる二祀邲其卣の銘文には「上下帝」の語が見えるが、偽作・偽銘説がある。仮に真作・真銘であるとしても、甲骨文初期に用いられた「下上」の語の解釈に、王朝末期の用例を安易に用いることはできないだろう。

<sup>(22)</sup> 例外的に、黄河の神である「河」に数例、邑方に対する降禍に関する卜辞があるが、河は卜辞中で祖先神に取り込まれていることが指摘されており、こうした卜辞も自然神としての性質を示したものではないと、蕭は述べる。

<sup>(23)</sup> 蕭良瓊、前掲論文。

<sup>(24)</sup> 《甲骨文合集 6664 正》甲辰卜争貞我伐馬方帝受我又一月

<sup>(25)</sup> 《鉄雲蔵亀 220.3》貞王作邑帝若

すなわち、戦勝の祐助を与える権限は帝と下上の両方に与えられているのに対して、戦争の諾否権限は帝には無く、下上にのみ与えられているのである。諾否・祐助ともに戦争に関わるト辞でありながら、こうした食い違いが生じていることは重要である。下上に戦争の諾否権限が備わっていて、下上に帝が含まれるなら、帝にも戦争の諾否権限が備わっており、両者に対して戦争諾否を貞トして不思議でない。しかし実際には、戦争諾否に関して、少なくともト辞上では両者には権能の上で明確な分別がされていたようである。だとすれば、戦勝の祐助に関する権能についても、戦争諾否の権限と同じように、下上と帝のいずれかに与えられ、片方への貞トで完結するのが自然に思われるが、実際には、戦勝の祐助に関しては、帝と下上の間に明確な区別は看取されないものであり、この食い違いは、いささか奇妙に映る。

次に前節(2)疾病に関するト辞例についてだが、このト辞には、同版上に次のト辞が見られる。

《甲骨文合集 14222 正乙》

...帝は王に疾を𠄎するか。(26)

《甲骨文合集 14222 正丙》

貞う、隹れ帝は、王に疾を𠄎するか。(27)

この両ト辞は 1 対の対貞であると思われ<sup>(28)</sup>、帝への貞トはこれで完結していると考えられる。必然的に、下上に貞トする《甲骨文合集 14222 正甲》のト辞は、帝への貞トとは別個に行われていると理解するべきであり、「下上」の語に帝が含まれると考える根拠にはならない。むしろ、内容こそ一致しているものの、全く別個の神に、別個のト辞によって貞トがされていると考えるべきではないか。

また、前節(3)下上に対する祭祀ト辞の存在も、従來說に反するものである。帝はト辞中で祭祀・供牲を享しない、というのは甲骨文研究者たちの見解がほぼ一致する<sup>(29)</sup>ところであって、下上への祭祀ト辞が存在することは、やはり「下上」の語に帝が含まれるとする説の矛盾を示しているといえる。「下上」の語に含まれる神のうち、帝以外の神格への祭祀行為であるとできなくもないが、苦しい説明であろう。

以上の通り、「下上」と帝には、ト辞上いくつかの類似点が存在するものの、前者に後

(26) 《甲骨文合集 14222 正乙》...帝𠄎王疾

(27) 《甲骨文合集 14222 正丙》貞隹帝𠄎王疾

(28) 対貞は、同一の内容について肯定と否定の両方のト辞によって貞トする形式のこと。

《甲骨文合集 14222 正乙》のト辞冒頭の欠損部には否定字が置かれた可能性が高い。

(29) 島邦男や赤塚忠など、一部に帝への祭祀が存在したとする説があるものの、それらは池田末利によって批判されて退けられている。それぞれ、島邦男『殷墟ト辞研究』(弘前大学文学部中国研究会, 1958 年), 赤塚忠『中国古代の宗教と文化』(角川書店, 1977 年), 池田末利「商末上帝祭祀の問題—享祀説の批判と不享祀の原因」(『東洋学報』73 号 1・2, 1992 年 1 月)。

者が含まれると考えるには矛盾や問題点が多く、「下上」に帝が含まれる根拠とするには、薄弱な類似であると言わざるを得ないだろう。蕭良瓊による批判と併せて、やはり「下上」に帝が含まれるとは考えにくい。

### 2-3 祖先神説の検討

「下上」に帝が含まれると考えられないのは前節の通りであるが、であれば比較的新しく登場した「下上」＝祖先神説についても、同様に検討しなくてはならない。祖先神説を採る研究者で、詳細な議論を行っているのは、前節でも登場した蕭良瓊と、末次信行の 2 人である。

まず蕭説について。蕭は、下上の持つ戦争諾否権限を「他部族に影響を及ぼす権能」であるとした上で、《甲骨文合集 6384》などに「告某方於某祖先」という形式の卜辞が習見であることから、これと同類の権能を祖先神も持っている指摘する。さらに、「上示」「下示」という祖先神の集団呼称が卜辞に現れることから、下上は祖先神で、上示・下示の両方をまとめた祖先神の総称が「下上」とであると述べる。「上示」「下示」については、《甲骨文合集 32616》に、「上」「下」への祭祀にあたって、祖乙（18 代）と小乙（26 代）という 2 人の祖先神からそれぞれ祭祀を行う旨の卜辞があることを挙げて、上示＝祖乙以下の祖先神、下示＝小乙以下の祖先神とする<sup>(30)</sup>。

《甲骨文合集 32616》

其の上に<sup>いの</sup>幸るに、祖乙よりせんか。

其の下に<sup>いの</sup>幸るに、小乙よりせんか。<sup>(31)</sup>

しかし、この卜辞で祭祀の対象とされる「自祖乙／自小乙」がそれぞれ上示・下示と一致するならば、卜辞は「其<sup>いの</sup> 幸 上（示）／下（示）」で十分なはずである。訴求対象の「上／下」と、祭祀対象の「祖乙／小乙」があえて区別されて刻されていることを踏まえれば、この卜辞は「上／下に祭祀を行うにあたって、（その上／下の一部を占めている）祖乙／小乙から祀ろうか」とも解釈できるのではないか。すなわち、「上／下」と「自祖乙／自小乙」の両範囲が、一致しない可能性もあるのではないか。上示／下示の範囲を見定めるには、この《甲骨文合集 32616》の卜辞だけでは不足しており、「上示／下示」卜辞をより詳細に検討する必要があるだろう。

この蕭説に対して、「下上」卜辞をほぼ全て、詳細に検討しているのが末次信行である。末次はその検討から、以下の①～④を根拠として、「下上」の語が示すところが、下＝下乙＝祖乙と、上＝上乙＝大乙であると論じている。

<sup>(30)</sup> 蕭，前掲論文。

<sup>(31)</sup> 《甲骨文合集 32616》

幸 其上自祖乙

幸 其下自小乙

①疾病に関する卜辞について、「下上」と帝は並立して貞卜されている（前掲《甲骨文合集 14222 正甲・正乙・正丙》）。

②《甲骨文合集 808 正》に、以下の 2 卜辞が見られる。

《甲骨文合集 808 正》

丙寅...亘貞う、王多屯を𠩺するに、下上に若（諾）せらるか。

貞う、王多屯を𠩺するに、下乙に若（諾）せらるか。<sup>(32)</sup>

これらは隣り合う一対の貞卜で、下乙が下上に対応する神として登場している。①と合わせて、下上一帝、下一下乙、という対応関係が看取され、下乙は帝と同等の権能を備えていると思われる。

③《甲骨文合集 1402》に、以下のような卜辞が存在する。

《甲骨文合集 1402》

A 貞う、成は帝に賓せらるか。

B 甲辰卜して𠩺貞う、下乙は成に賓せらるか。

C 貞う、下乙は帝に...

D 貞う、下乙は帝に賓せられざるか。<sup>(33)</sup>

「賓」は祭祀動詞で、「成」は「成唐（湯）」、すなわち殷王朝設立の祖湯王である。A・B の 2 卜辞では、帝に成が「賓」せられ、成に下乙が「賓」せられていて、下乙の上位に成＝大乙が置かれていることが分かる。加えて、C・D の 2 卜辞から、下乙もまた、成と並んで帝に「賓」せられる存在であったことが分かる<sup>(34)</sup>。

④以上の 3 点から、帝に対応する神格である「下上」は、帝と同等の権能を備えた下乙と、その上位存在で、同じ十干称谓を持つ大乙＝上乙であると考えられる。卜辞中に大乙を「上乙」と呼称する例がほとんどないが、当時から下乙に対応する「上乙」が、当然想定されたはずであって、王朝設立の祖とされる大乙は、王朝中興の祖とされる祖乙に比する存在とされただろうし、この 2 者が「下上」という特別な呼称を得ることはごく自然なことである<sup>(35)</sup>。

以上①～④が末次の議論の趣旨であるが、いずれも問題がある。

<sup>(32)</sup> 《甲骨文合集 808 正》

丙寅...亘貞王 𠩺多屯若于下上

貞王 𠩺多屯若于下乙

<sup>(33)</sup> A～D は引用者による付与・整序である。なお、以上 4 卜辞の隸定・釈読は、ここでは末次のものに従っている。筆者による隸定・釈読は後掲する（注 36）。

<sup>(34)</sup> C の卜辞は欠損があつて「賓」字は見えないが、位置関係などからしておそらく D に対応する、他卜辞と同内容の一連の卜辞であろうから、これも「賓」について貞卜したものと考えてよかろう。

<sup>(35)</sup> 末次信行、前掲論文。



まず①②の各ト辞であるが、先に述べたように、《甲骨文合集 14222》における「帝」ト辞は、「下上」ト辞とは別個の対貞として完結している。一方で《甲骨文合集 808 正》は「下上」ト辞と「下乙」ト辞で一对の対貞ト辞になっている。当然、帝と下乙それぞれの下上との関係を、これらのト辞によって、安易に結びつけることはできない。そもそも、《甲骨文合集 14222》は疾病関連のト辞、《甲骨文合集 808 正》は祭祀犠牲に関するト辞と、全く異なる内容であって、帝と下乙の権能が同等とする根拠とはならない。また、帝と下乙の権能が同等とするのは、③で末次自身が挙げる《甲骨文合集 1402》の各ト辞とも矛盾する。

その《甲骨文合集 1402》のト辞についてであるが、まず文字の誤読がある。当該ト辞中で末次が「成（𠄎）」とする文字は、実際は「咸（𠄎）」であり、成すなわち大乙ではなく、殷の先臣「巫咸」のことである。よって、当該ト辞から下乙と成、または帝と成の関係を論証することはできない。

付け加えて言えば、《甲骨文合集 1402》には他にもト辞があつて、それが末次の議論では完全に無視されている。改めて当該甲骨上のト辞を全て示せば、次のようになる。下線を施したト辞が、新たに示すト辞である。

《甲骨文合集 1402》

甲辰トして𠄎貞う、翌乙巳に父乙に有（侑）するに牢をもってし、用いんか。

貞う、大...は帝に賓せらるか。

貞う、大甲は帝に賓せられざるか。

貞う、大甲は咸に賓せらるか。

貞う、大甲は咸に賓せざるか。

貞う、咸は帝に賓せらるか。

甲辰トして𠄎貞う、下乙は咸に賓せらるか。

貞う、下乙は帝に...

貞う、下乙は帝に賓せられざるか。<sup>(36)</sup>

下乙、咸の他にも、父乙<sup>(37)</sup>と大甲（9代）という祖先神が登場している。この《甲骨文

<sup>(36)</sup> 《甲骨文合集 1402》

甲辰ト𠄎貞翌乙巳有于父乙牢用

貞大...賓于帝

貞大甲不賓于帝

貞大甲賓于咸

貞大甲不賓于咸

貞咸賓于帝

甲辰ト𠄎貞下乙賓于咸

貞下乙...于帝

貞下乙不賓于帝

<sup>(37)</sup> 武丁の父である小乙のことを指す。祖乙とは別神。

合集 1402》の一連の卜辞における「賓」の関係を整理すれば、「賓」の主体となっているのは帝・咸の2神で、「賓」の対象となっているのは咸・大甲・下乙の3神であることが分かる。父乙は「賓」卜辞には登場しない。すなわち、「賓」の主体になる帝、「賓」の主体にも対象にもなる咸、対象になる大甲・下乙、という区別が見て取れる。末次はこれらの同版卜辞を取り挙げず、成（実際には咸）及び下乙の帝との関係を論じるが、《甲骨文合集 1402》の卜辞から、成（実際には咸）及び下乙だけを「下上」として特別視するのは不自然で、根拠として不適當であろう。例えば《甲骨文合集 1657》などに、下乙が「賓」の主体となっている例があるから、下乙も咸と同じく「賓」の主体にも対象にもなっていたと論じること自体は可能であろうが、末次はこれに触れない。

④の結論に関しても、「上乙」卜辞がほぼ皆無であるのに、それを「当然想定されたはず」とするのは説得的でない。

末次説の不通は以上の通りである。卜辞への登場回数などから考えて、大乙と祖乙が、当時の祖先神の中でも重要な存在とされていた可能性は高いが、これを「下上」に当てはめることは困難であろう。

このように、蕭良瓊と末次信行の祖先神説は、「下上」に帝が含まれるとする従來說への批判こそ射たものではあるものの、「下上」の語が示す具体的な神格についての議論は、不十分であったり、誤りが多く存在したりしていて、これらをそのまま採用することはできない。そこで次節では、「下上」に関連する卜辞を検討していくことで、より正確かつ説得的な「下上」の語が示す神格についての理解を導くことを試みたい。

## 2-4 「下上」関連卜辞の検討

前節では蕭良瓊の議論を不十分であるとしたものの、「下上」を「下示／上示」に対応させる点については、いずれも祖先神に対して用いられる集合呼称であり、表記上の対応もあることから、妥当であろう。よって、「下示／上示」が何を指すかを考えることで、「下上」が何を指す語であるかも明らかになる。

まず、「上示」についてであるが、《甲骨文合集 102》の祭祀卜辞にこの語が見える。

《甲骨文合集 102》

...戌卜して貞う、𠩺百牛を見（献）じ、裂して用いるに、上示よりせんか。<sup>(38)</sup>

祭祀・供牲の対象として、上示以下の祖先神が挙げられている。「𠩺」字は隸定・釈義が定かでない。徐仲舒は「𠩺」と畢である𠩺に從い、カゴの中の鳥の形を象っている」と解して人名、または地名であるとする<sup>(39)</sup>。「畢（𠩺）」字は《説文》に「畢，田罔也」、つまり狩猟の道具とあり、「𠩺」字はあるいはその異体字で、狩猟によって得たものを犠牲とすることをいうものかもしれない。ともあれ、上示が何らかの祭祀の対象となっていることは確かである。

<sup>(38)</sup> 《甲骨文合集 102》...戌卜貞 𠩺見百牛裂用自上示

<sup>(39)</sup> 《字典》第八，914 ページ。

これに加えて、《甲骨文合集 14257》～《甲骨文合集 14260》の4片に「上子（示）」ト辞が見える。この4片のト辞はほぼ同じ文型であり、殷王への授祐をいうものである。

《甲骨文合集 14259》

貞う、上子（示）は我に其れ又（祐）を受（授）けざるか。<sup>(40)</sup>

この同版には、次のト辞も存在している。

《甲骨文合集 14259》

貞う、翌丁未に其れ易日たらざるか。<sup>(41)</sup>

同じく「上示」ト辞の刻される《甲骨文合集 14260》にも、同様の「易日」ト辞が刻されており、かつどちらも「易日」ト辞の上下に「上子（示）」ト辞が置かれていて、これらのト辞は関連する内容であったと考えられよう。すなわち、上示の与える祐助によって、「易日」、つまり災禍などが無い日がもたらされる、と読み取れる。言い換えれば、ある種の災禍を除去・予防する権能が上示に与えられていたものであり、「易日」ト辞の内容を検討することによって、その上示の権能について、ひいては上示という神格の範囲についての手がかりを得られる可能性がある。

次に「下示」ト辞について、《甲骨文合集》では《甲骨文合集 32330》、《甲骨文合集 34103》の2片に見える。いずれも祭祀・供牲についてのト辞となっている。

《甲骨文合集 32330》

丁未貞う、其れ大いに禦するに王上甲よりし、盟するに白豕九を用い、下示に牛を裂せんか、父丁の宗に在りてトす。<sup>(42)</sup>

また、この同版には、次のト辞も存在している。

《甲骨文合集 32330》

丁未貞う、恵れ今夕に酒して禦せんか、父丁の宗に在りてトす。<sup>(43)</sup>

「下示」ト辞に見える禦祭の他、「酒」という祭祀を行うかどうかは貞トされている。両ト辞はいずれも丁未の日に貞トされ、文末の「在父丁宗ト」も共通しているから、これらは関連する祭祀ト辞であって、ここでの「禦」「酒」は一連の祭祀であると見て良いだろう。

---

<sup>(40)</sup> 《甲骨文合集 14259》貞上子不我其受又

<sup>(41)</sup> 《甲骨文合集 14259》貞翌丁未不其易日

<sup>(42)</sup> 《甲骨文合集 32330》丁未貞其大禦王自上甲盟用白豕九下示裂牛在父丁宗ト

<sup>(43)</sup> 《甲骨文合集 32330》丁未貞恵今夕酒禦在父丁宗ト

う。この2字はいずれも祖先神への祭祀として甲骨文中に習見であって、これらの祭祀卜辞の検討は、その対象となる祖先神、ひいては下示に関する理解につながるであろう。

以上を踏まえて、(1)「易日」卜辞、(2)「禦」・「酒」各卜辞、の3種卜辞に登場する神格、特に祖先神の傾向から、上示・下示の性質とその範囲について論じていきたい。<sup>(44)</sup>

#### 2-4-1 (1)「易日」卜辞の検討

「易日」卜辞は、《甲骨文合集》には194例存在しており、そのうち、具体的な内容の示される卜辞や、その同版卜辞に貞ト内容が示されているものは、合計98片存在している。

その内訳をまとめたものが表1である。祭祀に関するものが最多の46片あるが、これは他の貞ト内容、例えば軍事の成功や降雨などと、それを祈求するための祭祀卜辞が、同版上に刻されている場合が多いためである。祭祀関連以外での最多なのは王の行動に関するもので、33片ある。特に「王歩」の語が見える卜辞が31例あって最も多く、その他にも「王渉」、「王狩」などの語が見えるものがある。「歩」や「渉」など、王がある場所に向かうことは、当然ながら多分に政治的・軍事的な意味を持つ行為であり、「狩」もまた軍事演習としての意味合いが強い。軍事関連の11片と合わせて、「易日」卜辞の多くが軍事行為に関わる内容であるということになる。天候に関する卜辞も、「王歩」や「王狩」に際して降雨があるかを貞トする例が見られ、「易日」の語が、王の政治的・軍事的行動と密接な関係にあったことを示唆している。《甲骨文合集 14259》などで上示に対していわれる「我其受又」の語句が、戦勝に関する卜辞に頻出することも、これと符合する。

次に、祖先神との関係について。「易日」卜辞及びその同版卜辞中に登場する祖先神とその回数は表2の通りである。サンプル数が少なく、また同版上にあるからといって必ずしも関連する卜辞であるとは限らないという前提を踏まえる必要があるが、明確な傾向を見出すことは難しい。始祖上甲や示壬、唐などの比較的上の世代の祖先神から、26代小乙まで広い世代の殷王祖先神が登場しており、殷王ではなく殷の旧臣である黄尹、殷王の配妣、そして河なども登場している。一定の集合性によるま

表1

内容	甲骨片数
祭祀	46
王	33
天候	20
軍事	11
受年	2
その他	10
不明	28

表2

神名	登場回数
祖乙	6
上甲	4
小乙 祖丁 大甲	3
羌甲 唐 十示	2
示壬 祖辛 盤庚 黄尹 妣己 妣甲 河	1

<sup>(44)</sup> 以下での集計にあたっては、《甲骨文合集》に収録されている卜辞の、明確に刻字されているものを対象とし、欠刻・損耗等を憶補したものは基本的に除いている。また、「成／唐／大乙」など同一の神格を指す呼称は全て合算しており、「父某」などの呼称も可能な限り個別の呼称を特定して合算している。

とまりは見出しにくく、「易日」に関する権能は、祖先神に広く与えられていたと考えるべきだろう。

表 3-1

神名	登場回数
小乙	45
妣己	40
妣庚	26
婦好	23
祖丁	22
祖辛	19
母庚	17
上甲	14
祖乙, 妣癸	13
羌甲	12
兄丁, 南庚	10

表 3-2

神名	登場回数
大乙, 武丁	9
大甲, 婦鼠, 河	7
妣甲, 妣乙, 妣辛	6
母丙	5
虎甲, 小辛, 妣壬, 母己, 婦姁	4
大丁, 盤庚, 兄戊, 婦嫫, 妣丁, 子庚, 父乙, 父丁, 父庚	3
高祖王亥, 父戊, 婦妊, 母辛, 兄乙	2
祖癸, 小丁, 祖甲, 兄甲, 兄庚, 祖庚, 大庚, 大戊, 祖戊, 父己, 父甲, 母壬, 大示, 二示, 三示, 四兄, 四妣, 多兄	1

#### 2-4-2 (2)「禦」・「酒」各卜辞の検討

まず「禦(𠄎)」字について、午(𠄎)と𠄎(𠄎)に作り、あるいは「示」を伴って「𠄎」に作られる。羅振玉は「𠄎と午字は同じ形で、馬の策を象ったものであろう。この策を道中で持っている人が御である」<sup>(45)</sup>とし、王襄は「𠄎は紐で、つまり鞭の形であり、古文の午である。𠄎は人がひざまずく形である」<sup>(46)</sup>とするなど、馬具と人間の象形という見解が多いが、聞宥のように「午は声符である」<sup>(47)</sup>とする説もある。釈義については、『説文解字』に「禦, 祀なり」とあって、あるいは「𠄎は人が跪いて迎える象形である」として神を迎える祭祀であるとする説<sup>(48)</sup>、「進献する義が主である」とする説<sup>(49)</sup>、「疾病を禳う義である」とする説<sup>(50)</sup>などがある。このうち、疾病との関連は、卜辞上の用例を挙げて指摘する研究者が多く<sup>(51)</sup>、信頼するに足る。つまりは、主に病災を除去するための祭祀であるといえる。

<sup>(45)</sup> 羅振玉：《殷虛書契考釈》中，1914，70 葉上。

<sup>(46)</sup> 王襄：《古文流變臆説》《王襄著作選集》中冊，2006，天津古籍出版社，49 ページ。

<sup>(47)</sup> 聞宥：《殷虛文字孳乳研究》《東方雜誌》二五卷三號，56 葉。

<sup>(48)</sup> 聞宥，同上。

<sup>(49)</sup> 赤塚忠撰『稿本殷金文考釋』，1959 年，727 ページ。

<sup>(50)</sup> 楊樹達：《積微居甲文說・卜辭瑣記》，北京：新華書店，1954 年，70 ページ。

<sup>(51)</sup> 例えば許進雄（〈釋御〉《中國文字》十二冊，台灣：國立台灣大學文學院古文字學研究室編印，1972 年）や裘錫圭（〈安陽新出土的牛胛骨及其刻辭〉《考古》第 5 期，1972 年，43～45 ページ），王貴民（〈説〈御〉史〉《甲骨探史錄》，303～323 ページ）など。

表 4-1

神名	登場回数
上甲	103
祖乙	48
河	38
大乙	36
祖丁	19
大甲, 自上甲卒至于多毓	17
小乙	16
妣庚	13
武丁	12
岳	11

表 4-2

神名	登場回数
祖己	10
示壬, 妣己	9
祖辛, 中丁, 大庚	7
王亥, 大丁	6
祖庚, 母辛	4
示癸, 羌甲, 黄尹	3
𠂤乙, 祖甲, 婦好, 伊尹, 兄丁, 母庚, 夔, 四方, 九示自大乙至祖丁	2
𠂤丙, 𠂤丁, 大戊, 小甲, 祖戊, 父戊, 小辛, 虎甲, 盤庚, 小丁, 文武帝, 妣癸, 妣丙, 妣壬, 妣辛, 母癸, 母己, 母戊, 咸, 三𠂤, 小示, 五示, 十示, 父甲至乙, 自上甲至父甲, 自上甲六示, 自上甲十示, 自上甲二十示, 自大乙卒至于多毓, 自祖乙至毓	1

「禦」祭卜辞は《甲骨文合集》に 831 例がある。これらの卜辞のうち、神名が登場するのは、延べ 401 回である。各神名の登場回数は表 3 の通り<sup>(52)</sup>で、小乙の登場回数が最も多い。次いで回数が多いのは妣己・妣庚であるが、甲骨文の祖先神に妣己・妣庚は何人か存在しており、それらを区別していないことを断っておく。ただ、妣己あるいは妣庚を配妣とする殷王である父乙（＝小乙）、祖丁らが登場回数上位にいることを踏まえれば、彼女らがある程度多く登場していることも自然であろう。

一方の「酒（𩚑）」字について、羅振玉は「酒を熱して祖廟に備え、その後天子と群臣がこれを朝廷にて飲む」祭儀だとする<sup>(53)</sup>。葉玉森は「酒器を持つ手を象った祭祀を意味する字」<sup>(54)</sup>とし、李孝定は「𩚑は酒が大地に滴る象形で、これをもって祭祀の象形としている」として、酒を地面に流す祭儀の象形と解する<sup>(55)</sup>。これらに対して、于省吾は「契文で水が滴る象形を 𩚑につくる例は無い」と述べ、また他の用牲法と併せて用いられる例が多いことから、「祭祀名と理解するべきであって、祭法ではない」と主張する<sup>(56)</sup>。釈義に関しては、羅振玉以来、祖先神に対する祭祀ないし祭法であるとする点は諸家一致して大きな異論は無い。

<sup>(52)</sup> 例えば「兄乙」が登場する《甲骨文合集 32729》は王による卜辞ではないとされており、これらは殷王の祖先神でない可能性が高いが、こうした神名も今回はひとまず計上している。

<sup>(53)</sup> 羅振玉：《増訂 殷虛書契考釈》中，1927，25 葉。

<sup>(54)</sup> 葉玉森：《殷虛書契前編集釈》一卷，台湾：芸文印書館，1966，47 葉下。

<sup>(55)</sup> 李孝定主編：《甲骨文字集釈》第十四，台湾：中央研究院歷史語言研究所，1970，4399 ページ。

<sup>(56)</sup> 于省吾主編：《甲骨文字詁林》，上海：中華書局，2017，2707 ページ。

「酒」ト辞は《甲骨文合集》に 1277 例があり、そのうち神名が登場するのは延べ 468 例存在する。各神名の登場回数は表 4 の通りである。上甲の登場回数が圧倒的に多く、その他では祖乙、唐が特に多く登場している。また、河の登場回数が唐を上回っている他、岳も 11 例登場しており、酒祭は祖先神に限らず、自然神などを対象とすることも多かったことが見て取れる。

さて、「禦」ト辞と「酒」ト辞を比較してあらためて表 3～4 を見渡せば、まず「酒」ト辞における集合的な呼称の多さが目につく。14 種 32 例ある集合的な呼称のうち、半分ほどを「自上甲卒至于多毓」<sup>(57)</sup>が占めているが、その他にも「自上甲○○」形式の集合的呼称は多く、祖先神における上甲の重要性が読み取れる。一方の「禦」ト辞では、祖先神の集合的な呼称は 6 種 6 例のみである。うち、「三𠂔」は𠂔乙・𠂔丙・𠂔丁を、「二示」はおそらく示壬と示癸を指していると思われる。この 5 人の祖先神は、王朝建国の祖・大乙に先行する殷王であり、始祖上甲とともにまとまってト辞に現れる例が、《甲骨文合集 32349》などに見られる。

《甲骨文合集 32349》

辛亥トす、上甲に牛を、三𠂔に羊を、二示に牛を毛せんか。<sup>(58)</sup>

他の「四兄」「四妣」なども、その称谓や世代などで近い祖先神をまとめて呼称したものであると思われ、「酒」ト辞での集合的呼称に対して、比較的狭い範囲でまとまっている集合であるといえよう。総じて、禦祭はより個別的、酒祭はより全体的な祭祀対象を取る傾向が見て取れる。

次に、各祖先神の登場回数を比較してみよう（表 5）。「下上」の語が用いられたのは武丁の時期であるが、この武丁以前の祖先神のうち、祖乙以前の殷王祖先神は全員、「酒」ト辞への登場回数が「禦」ト辞以上である。対して祖辛～小乙では、「酒」ト辞に 1 回登場するのみの虎甲を除き全員が「禦」ト辞への登場回数が「酒」ト辞よりも多いという、全く真逆の傾向を示している。ここには明らかに、祖先神としてのグループの区分が存在する。これがまさに、「上示／下示」の区分なのではないか。すなわち、《甲骨文合集 32330》などで禦祭の対象とされている「下示」は後者に当てはまるのであり、その対概念としての「上示」は前者に当てはまると考えられるのである。付け加えて言うと、「易日」ト辞およびその同版において、「禦」ト辞は 2 例のみであるのに対して、「酒」ト辞は 13 例存在することは、前者の祖先神グループの傾向と一致している。また、黄尹や河などが「易日」ト辞の同版ト辞上に現れることがあって、これは「酒」ト辞と一致している。上示と関連のある「易日」ト辞におけるこれらの証拠は、「上示」＝祖乙以前の祖先神という仮説を補強するだろう。

<sup>(57)</sup> 「毓」は王の尊称・廟号。《字典》巻十四、1582 ページ。

<sup>(58)</sup> 《甲骨文合集 32349》辛亥ト毛上甲牛三𠂔羊二示牛

表 5-1

神名	饗	酒
上甲	14	103
𠂔乙	0	2
𠂔丙	0	1
𠂔丁	0	1
示壬	0	9
示癸	0	3
大乙	9	36
大丁	3	6
大甲	7	17
卜丙	0	0
大庚	1	7
小甲	0	1
大戊	1	1
雍己	0	0
中丁	0	7
卜壬	0	0
𠂔甲	0	0

表 5-2

神名	饗	酒
祖乙	13	48
祖辛	19	7
羌甲	12	3
祖丁	22	19
南庚	10	0
虎甲	0	1
盤庚	3	1
小辛	4	1
小乙	45	16
武丁	9	12
祖己	0	10
祖庚	1	4
祖甲	1	2
康丁	0	0
武乙	0	0
文丁	0	0
文武帝	0	1

### 3. 「下上」の宗教的意義

「下上」は祖先神の総称である上示・下示をさらにまとめて呼んだものであり、この上示・下示はそれぞれ祖乙以前の殷王祖先神と、祖辛から小乙までの殷王祖先神を指すことが確認できた。では、これらは甲骨占トという宗教的行為の中で、どのような位置付けを与えられていたのだろうか。あえて祖先神を上示・下示という 2 つのグループに分けて呼称し、さらにそれを「下上」と総称することは、いかなる意義を持っていたのだろうか。

#### 3-1 「上示」・「下示」

上示が「易日」ト辞に関わることは、すでにいくつかの証拠を挙げて述べた。しかし一方で、前節の(1)で見たように、「易日」に関わる権能は、必ずしも上示＝祖乙以前の祖先神に限定されたものではなかった。では、何をもって上示は「易日」ト辞に関わることになったのだろうか。結論を先に示せば、それは祖先神という集合における全体性だったと考えられる。

改めて表 5 を見れば、上示の祖先神たちの間には、「饗」・「酒」両ト辞への登場回数に大



きな格差が存在していることが一目瞭然である。登場回数が多い上甲（計 117 回）、大乙（計 45 回）、大甲（計 24 回）、祖乙（計 61 回）などに対して、その他の祖先神は全てひと桁回数しか登場せず、一度も登場しない祖先神も 4 神（卜丙、雍己、卜壬、𠩺甲）存在していて、この傾向は甲骨文全体での各祖先神の登場回数に関しても同様<sup>(59)</sup>である。すなわち、甲骨文における上示は、強力な存在感を放つ一部の祖先神と、その影に埋没する祖先神とに二分されているのである。

異なる性質のものを総称することは、その全ての性質をひとつの概念の元に統合することとして考えられる。すなわち、この対照的な性質の祖先神たちをひとまとめにグループ化して総称することは、埋没する祖先神を、強力な存在感の下へと集合させ取り込んでいくことを意味したと考えられる。言い換えれば、個別の神格としては比較的弱小な祖先神を、比較的強力な祖先神のもとに包摂させ、集合的・全体的な存在とみなすことで、一方ではその弱小さを解消し、また一方ではその強力さをより広範なものにしたのである。上示の祖先神は、その回数の差こそあれ、ほとんどが「酒」卜辞には登場しているが、この「酒」卜辞に多く見られる「自上甲卒至于多毓」などの集合的呼称や、《甲骨文 808 正》で下上と対置される下乙の例は、まさにこの弱小な祖先神の、強力な祖先神の下への集合・包摂を示す格好の例である。「易日」卜辞における上示も、この集合的・全体的な祖先神として現れていると考えられよう。「易日」卜辞の主題は王の政治的・軍事的行動で、王朝の一大事であるから、個別の祖先神だけでなく、全体的な祖先神による祐助の有無が貞卜されたのだろう。

一方の下示はどうであろうか。下示に属する祖先神たちは禦の対象の中心を占めているが、これは主に病災の除去を訴求するという禦祭の性質からすれば自然である。災禍は人格的な意思を持つ神によってもたらされるものであり、卑近な世代の祖先ほどその個別性・人格性が色濃く残るのは当然だからである。実際、祖辛以下の祖先神は降禍の主体となることが比較的多く<sup>(60)</sup>、また「禦」卜辞に最も多く登場するのが、武丁の父・小乙であるのも、これをよく表しているといえる。《甲骨文合集 32330》などで、下示もまた禦祭の対象となっていることから、下示という総称の使用においても、こうした卑近さや個別性・人格性は一定程度保持されていたと考えられ、これは全体性・代表性を特徴とする上示と対照的である。

すなわち、上示・下示というグループの境界は、祖先神の個別性・人格性における転換点でもあるということになる。その境界となっている祖乙から武丁までは 5 世代の開きがあるが、これは『礼記』喪服小記の「子を別けて祖を為し、別を継ぎて宗を為し、禰を継ぐは小宗を為す。五世にして遷る有るはこれ宗、其れ継ぐは高祖者なり」との記述<sup>(61)</sup>と一

<sup>(59)</sup> 《甲骨文合集》全体で、上甲は 541 例、大乙は成・唐などと合算で 515 例、大甲は 245 例、祖乙は 788 例登場するが、その他はほとんどがふた桁回数の登場で、卜丙（4 例）などひと桁回数の登場のみである祖先神もいる。

<sup>(60)</sup> 落合淳思『殷代史研究』（朋友書店、2012 年）などもこれを指摘している。

<sup>(61)</sup> 池澤優『「孝」思想の宗教学的的研究 古代中国における祖先崇拜の思想的発展』（東京大学出版会、2002 年）の第二章第三節では、この『礼記』の記述が、西周金文における祭祀の実践とも一致していたことが指摘されている。

致しており、周代の祖先祭祀における世代の区分は、殷代の甲骨文においてすでに形成されていたことがうかがえる。

### 3-2 「下上」

「上示」という呼称が、異なる性質を持つ祖先神の総称であったのと同様に、「下上」という呼称も、上示と下示という対照的な性質を持つ集団を、さらにひとまとめの概念として統合するものである。すなわち、「下上」は上示の全体性・代表性と、下示の卑近性・個別性の両方を備える神格として存在したと考えられよう。ここで考えたいのは、なぜそのような複数の性質が統合され、集合的概念として捉えられたのか、である。上示も下示も、そもそもが集合的概念とされた祖先神なのであって、あえてそれをさらなる集合的概念へと統合した理由はなんだったのだろうか。

先に述べた通り、下上という神格の中心的な権能は、戦争における諾否と祐助である。しかし、上示と下示についてはその限りでない。戦争に関わる卜辞である「易日」卜辞と上示が関連することは先に検討した通りであるが、上示に対して直接戦争の諾否などを貞トする例は存在せず、下示にいたっては、戦争関連の卜辞に登場する例がそもそも見当たらない。すなわち、「下上」という総称によって、上示と下示に、戦争関連の権能が上乘せられているのである。

この、下上の持つ戦争関連の権能、特に祐助について、帝と類似の権能であり、しかし一方では下上と帝の戦争関連の権能には微妙な食い違いがあることは、先に示した通りである。帝と類似の権能を持つ点からは、祖先神が帝と近い存在として扱われていることが、逆に食い違いからは、帝に無い性質を下上が備えているらしいことがうかがえる。この視点に立てば、戦争関連卜辞において、上示の全体性・代表性と下示の卑近性・個別性を兼ね備えた存在として「下上」の呼称が必要とされた理由が見えてくるだろう。

帝は甲骨文上では祭祀・供性を受けない、不可触の存在であった。池澤優によれば、甲骨文上の宗教世界には、帝の下位に祖先神が位置するという階層構造が存在し、《甲骨文合集 1402》などに見られる祖先神と帝の関係は、当時の人々が不可触な最高神に接触するための、一種の仲介チャンネルとしての祖先神の機能を示すものであったという<sup>(62)</sup>。戦争卜辞においても、こうした帝と祖先神の階層構造が垣間見える例が存在する。

#### 《甲骨文合集 6664 正》

甲辰トして争貞う、我馬方を伐つに、帝は我に又（祐）を受（授）くるか。一月。

戊午トして争貞う、夷れ王は自りて漉に往くか。

乙酉トして争貞う、隹れ父乙は𠄎降すか。

辛亥トして王貞う、父乙に𠄎するに、百牢をもってせんか。十一月。

…トして𠄎、示壬に侑せんか。

貞う、上甲に侑するに、三牢をもってし、我が𠄎に告せんか。

<sup>(62)</sup> 池澤優「死および死者崇拝・死者儀礼の宗教的意義に関する比較文化的・統合的研究」（平成 12～14 年度科学研究費補助金（基盤研究 C(1)）研究成果報告書、2003 年）など。

貞う、上甲に一牢をもってし、我が𠩺 𠩺 に告せんか。<sup>(63)</sup>

「馬方」なる敵対部族の征伐についての卜辞、父乙による「𠩺」、すなわち降禍について貞卜する卜辞、父乙・示壬・上甲に対する祭祀卜辞が見える。降禍の内容や祭祀の目的は、この「馬方」との戦争に関するものと見るのが自然であろう。つまり、父乙により馬方との戦禍が降され、その除去を、降禍の主体である父乙および上位の祖先神たちへの祭祀と、帝の祐助によって実現しようとしている、と読める。ここからは、祭祀によって人々から接触され訴求を受ける祖先神と、祭祀を受けない超越的な立場から祐助を与える帝という構図が見て取れる。

このように、帝は祖先神に優越する立場にあったのに対して、戦争関連卜辞における下上と帝は、少なくとも権能の上では類似した、ほとんど同等ともいえるような存在となっている。この、祖先神の権能上の「上昇」に際して要求されたのが、上示に特徴的な全体性・代表性だったのではないだろうか。その全体性は、上位世代の祖先神だけでなく、直近世代の祖先神まで包摂したことで、帝に対置されうるだけの強力な神格たりえたのだろう。

一方で、《殷虚文字 乙編 4065》や《甲骨文合集 809 正》などに下上が祭祀を受ける例が存在することは、下示に特徴的な卑近性や、人々が帝に間接的に接触するためのチャンネルとしての機能などが、下上にも残されていることを示しているだろう。下上の主たる権能である軍事は、当然王朝の一大事であるから、神格としての強力さのみならず、祭祀などで人間側から能動的に働きかけることによって、運命を好転させる可能性が求められたのではないだろうか。あるいは「下上」という、直感的には不自然なこの語順も、この階層構造における接触可能性が最も顕著であることから、下示を意味する「下」の字を先に置いたものかもしれない。ともかく、下上が祭祀を受けることは、帝にはない特徴であって、これは祖先神の中でも「下」＝下示が特に強く示す性質を反映していると考えられる。祭祀対象となること自体は、《甲骨文合集 102》のように上示にも見られる特徴ではあるが、ともかく祭祀対象となりうる卑近性・接触可能性が「下上」の語においても保存されていることは重要であろう。

まとめるなら、「下上」という語は、「上示」の持つ全体的・代表的な性質と、「下示」の持つ卑近で接触可能な性質の、両方を併せ持つことで、帝に比肩しうる強力な神格とされながら、当時の人々も祭祀などによって接触可能である存在としての位置づけを与えられ、軍事という王朝の一大事における問題解決を担っていた、ということになる。

<sup>(63)</sup> 《甲骨文合集 6664 正》

甲辰卜争貞我伐馬方帝受我又一月

戊午卜争貞夷王自往漚

乙酉卜争貞佳父乙降𠩺

辛亥卜王貞 𠩺 父乙百牢十一月

...卜設侑于示壬

貞侑于上甲三牢告我𠩺 𠩺

貞一牢于上甲告我𠩺 𠩺

#### 4. 終わりに

ここまでの議論によって、その語が指示する具体的神格を確定すると共に、この集合的な呼称の使用は、古代中国に通底する祖先崇拜の枠組みの中で、帝という不可触の最高神に対して、接触可能な祖先神を並び立たせることで、軍事問題の解決における機能を期待されたものであった、という結論に至ることができた。

しかし、甲骨文における「下上」には、未だ問題が残されたままであると言わざるを得ない。というのも、今回扱った甲骨文第 1 期の「下上」ト辞以外に、甲骨文第 5 期、すなわち末期の「下上」ト辞が 1 例存在しているからである。さらに言えば、この第 5 期には、「下上」と同一の神格を示すと思われる「上下」の語が用いられるト辞が複数例存在している。これら一連の第 5 期「下上／上下」ト辞は、呼称の変化や文型の相違など、第 1 期「下上」ト辞とは大きく異なるト辞である。また、甲骨文の第 1 期から第 5 期の間には、最高神としての帝への信仰が消失したり、祖先祭祀制度が五祀周祭と呼ばれる体系へと整備されたりするなど大きな宗教的变化が生じていることが知られている。表 5 において、武丁以下の殷王では再び「酒」ト辞への登場回数が優位になるという転換が生じていることも、こうした変化の一環として捉えうるだろう。第 5 期「下上／上下」ト辞については、これらの変化を踏まえた上で、また別個に精密な検討が必要であろう。ひとまずは第 1 期「下上」ト辞に関しての結論を得たことに満足しつつ、さらなる甲骨文研究の地平への展望をもって、この論文の結びとしたい。

#### 参考文献

甲骨文の拓本を引用した著録は以下の通り。

劉鶚：《鉄雲蔵龜》，1903。

美國方法斂摸，美國白瑞華校：《庫方二氏蔵甲骨ト辞》，上海：商務印書館（Frank H. Chalfant draw, Roswell S. Britton ed., *The Couling-Chalfant Collection of Inscribed Oracle Bone*, Shanghai, Commercial Press），1935。

董作賓著，李濟・梁思永編：《小屯 第二本 殷虚文字乙編》，台湾：中央研究院歴史語言研究所，1948。127 坑を含む小屯遺跡第 13 次～第 15 次発掘で得られた甲骨を収録している。なお，1993 年に，初刊本にあった誤りを訂正し，歴史語言研究所の元拓を収録して再刊された。

中国社会科学院歴史研究所編（郭沫若主編）：《甲骨文合集》，北京：中華書局，1977～1982。

また，字説については以下を大いに参照した。

李孝定編：《甲骨文字集釋》，台湾：中央研究院歴史語言研究所，1970。

于省吾主編：《甲骨文字詁林》，北京：中華書局，2018（初版 1996）。

徐仲舒：《甲骨文字典》，四川：四川辞書出版社，2012（初版 1988）。

## What Is the “下上” in Oracle Bone Manuscripts?

Katsuma TAMIYA

This paper aims to uncover what the word “下上(upper-and-lower)” in oracle bone manuscripts stands for. It is clear that although this is a collective name of spirits, the names of individual spirits included in “下上” are unclear. Some scholars argue that “上” is 帝, the supreme deity of ancient China, whereas “下” refers to the spirits of ancestors, nature, and others. Others also speculate that while “下上” means only the spirits of ancestors, “上” is understood as the earlier ancestors, and “下” is later. Moreover, more questions should be asked about why a collective name for the spirits was used or what role or effect the collective name had. In this article, I investigated the oracle bone texts, which include the word “下上” and how they relate. Through this inquiry, I came to show that “下上” means the spirits of ancestors and that using a collective name had an effect that renders such ancestors equivalent to 帝 while allowing people to be near them through sacrifice and ritual.